

文化

身につけられる「コンピューター」時代来るか

機器を目立たせぬ服 研究進む

コンピューターが服になる、そんな時代が来るのだろうか。「ウェアラブル(身につけられる)コンピューター」の国際会議(ISCWC2005)が大阪で開かれ、最新技術が発表された。

(鈴木京一)

これまででは米欧で開かれ、9回目の今回、初めてアジアで開催された。125件の応募から13カ国の45件が選ばれて発表した。電子機器の装着を前提にした、衣服の研究が目立った。ウェアラブルコンピューターという、めがねのように装着するヘッドマウントディスプレイを連想し

大阪で国際会議



がただが、実用化に向け、機器を目立たないよう自然

に埋め込むことを目指す研究者も多い。

はこだて未来大の戸田真志・助教授らの「Text i e Net」は「電気を通す服」。「身につける電子機器が増えたとき、ケーブルが絡まる事態を避けられる」と戸田さんはいう。

ニューヨーク在住のデザイナ・阿部香穂さんは、

袖のボタンを電子機器のスイッチにし、写真上り、ケーブルを埋め込んだ服を発表した。阿部さんも「あまりコンピューターを目立たせない方がいいのではないか」という考えだ。

海外の研究でも同じ傾向が見られ、ドイツの研究者は、服に縫い込める柔らかい電子部品を発表した。

一方、「目立つウェアラブル」にこだわり続けるのは、片眼のヘッドマウントディスプレイを常に装着している神戸大の塚本昌彦教授ら。同時に開催された一般向けの講演会で、「5年後は渋谷と梅田の若者がみんなこの格好をしていま



す」と予言しつつ、「5年前から同じことを言っているんですが……」と笑わせた。

海外からの参加者には、日本の携帯電話が注目された。海外の携帯電話は通話とメール使用が中心だが、日本の携帯電話はインターネット、地理案内、テレビなど多機能に及んでいる。携帯電話会社の担当者の講演に「どのように収益を得ているのか」「基本ソフト

はどうなっているのか」など質問が相次いだ。

実行委員の河野恭之・奈良先端科学技術大学院大助教授は「日本には、すでに携帯電話で商用化されている技術がたくさんある。しかし学会では紹介されないのが、海外の研究者に知られていない」と話す。

実行委員代表の志水英二・宝塚造形芸術大教授によれば、「ウェアラブル」の学術研究が盛んなのはアメリカで、「学術面では、日本は水をあげられている」という。だが、携帯電話大の日本はすでに「ウェアラブル」の国になりつつあるのかもしれない。